98　アトピー性皮膚炎の「ア」と阿弥陀仏の「阿」は同じ意味である

藤岡　彰[1)]，藤岡　和美[2)]

[1)]藤岡皮フ科クリニック，[2)]日本大学医学部 病態病理学系臨床検査医学分野

アトピー性皮膚炎すなわちatopic dermatitisは「本来そこにあるべき場所」という意味のギリシア語のtoposに由来する．Toposに接頭語aがついてatoposとなり，これからatopyという言葉が生まれる．接頭語のaには「～へ」の様に本来の場所から離れていく意味があるから，否定的な意味合いも生じ，atoposは本来の場所とは離れた，さらに一般的ではないという意味となる．Atopyの名称は1923年にCocaとCookeによって初めて用いられ，その後SulzbergerがAtopic dermatitisを提唱する．ただし最も古いatopic dermatitisの症状の記載は「ローマ皇帝伝」にある初代皇帝Augustusの臨床症状とされる．ところで日本人にはtoposという単語はなじみが薄いと思われるが，ギリシア哲学を起源に文学，さらには位相幾何学に至るまで，西洋では様々な分野で使用されてきた単語といえる．

18世紀後半にカルカッタに赴任した英国の高級官僚で東洋学者のウイリアム・ジョーンズ卿は任地でサンスクリット語の研究をするが，ギリシア語やラテン語との共通点が多いことに気付く．結局サンスクリット語はヨーロッパの言語と同じ系列のものであることがわかり，印欧祖語の研究が始まる，

さて仏典では，サンスクリット語の音をそのまま訳す場合と意味が訳される場合がある．さらに後者の例だが，父がインド人で西域に生まれた鳩摩羅什は直訳で観世音菩薩と訳したが，唐出身の玄奘三蔵は，般若心経の中で意訳した形で観自在菩薩と訳している．南無阿弥陀仏とはサンスクリット語の音を残して漢訳された仏典によって日本に入ってくるが，印欧祖語の研究から，南無とはname（名前を挙げて唱える，尊ぶ），阿弥陀はameter（aは前述した様に，否定の意味を持つ接頭語，meterは測量するなので，測量できない程大きい），仏はBuddahaということが解明されている．したがって南無阿弥陀仏とは「唱えよう，計り知れぬほど大きなブッダの名を」の意味になる．これより阿弥陀仏の「阿」は否定の接頭語aで，これはatopic dermatitisのaでもあるから，演題の内容がまさに示されたことになるのである．

ところで元々同一だったサンスクリット語とヨーロッパの言語が別れていく原因が，ノアの方舟の大洪水だった可能性がある．紀元前紀元前6200年から400年続いたミニ氷河時代では地中海の海岸線は現在より15メートル低かった．さらに現在の黒海の場所には何千年もの気象条件が地中海よりも水位が150メートルも低いエウクセイノス湖があり，巨大なオアシスを形成していた．しかしミニ氷河期終了後から2000年間ヨーロッパは気温最適期となるが，この温暖化は海水の中へと氷を融解させ地中海の海面を上昇させる．紀元前5600年頃地中海の海水はかつての丘を越えて，時速90キロ以上の速さの150メートルの滝となってこのオアシスへと降り注いだ．そしてわずか2年の歳月でこの湖の水位は地中海と同じくなり，地中海に続く現在の黒海が誕生する．異論もあるが，この現象はシュメールの粘土版に洪水伝説を残し，物語はバビロニアのギルガメッシュ叙事詩を経て，ノアの方舟に受け継がれた．西洋人には数千年にも及び伝承された伝説となったためか，サイモンとガーファンクルの1970年のヒット曲「明日に架ける橋（Bridge Over Troubled Water（洪水））」にも隠喩として使われているともされ，実際この歌は米国の9.11の際にも，40年近い歳月を経て再びニューヨークから全米の多くの人々へと歌われていったという．

大洪水後，エウクセイノス湖があった巨大なオアシスの地から人々は四方へと移住していったと思われるが，この土地こそが印欧祖語の故郷と考えている学者は多い．